

【概要と背景】

障害者の生涯学習支援体制構築に向けて、大学が取り組むことのできる実践のオプションを広げることがめざして、今年度から開始した新規事業である。神戸大学では、地域における社会教育施設の運営や障害者が働いたり学んだりするカフェの運営など、本事業に着手する前提となる取り組みをしてきている。その土台の上に、知的障害者を聴講生として受け入れ、一般学生と共に学ぶ授業、知的障害学生向けのオムニバス授業、フィールドワークをセットにしたプログラムを提供した。なお、本プログラムの名称は「学ぶ楽しみ発見プログラム」とし、愛称をKUPI（Kobe University Program for Inclusion）とした。

【事業推進経過】

2019年7月に募集要項公開し、8月に入試を行った。入試には14名の応募があり、うち11名が合格となった。合格基準は、募集要件に適合しているか、学ぶ意欲があるか、という点であった。合格者は、入学までに聴講生制度の手続きを行った。10月に入学式を行い、授業を開始した。授業は火・水・金の週3日で、17時～20時に行った。受講生は「難しいけど楽しい」と言いながら熱心に通った。なお、途中で受講できなくなった学生が1名いたため、修了者は10名であった。

【組織・体制】

兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校、神戸大学国際人間科学部、人間発達環境学研究科によって構成された連携協議会を3回開催した。プログラムを直接推進したのは、神戸大学人間発達環境学研究科教員の他、コーディネイター（2名）、メンター学生（各曜日3～6名）、県教育委員会からの研修生などであった。

【成果と課題】

KUPI学生募集：夜間、山の中腹に立地する大学、短期間での募集という悪条件に関わらず、予期したより多くの応募者がいた。授業開始後も問い合わせが続き、学習意欲の高い知的障害者が多くいる実感を持つことができた。

学習プログラム：試行錯誤の連続で、それぞれの曜日で固有の課題に直面した。しかしそれらの多くは教員や学生にとって新たな学びとなる有意義な課題であった。

支援方法：コーディネイターやメンター学生が、KUPI学生と親しくコミュニケーションをとり、ていねいにサポートしたことで、KUPI学生の学習満足度が高まった。



【今年度のねらい】

同様の取り組みのモデルとなる知見を得るため、以下のような内容に焦点を置いて取り組んだ。第一にどのような条件設定によってどのような知的障害者の学習意欲が喚起されるのかを確認しながら進めた。（学生募集要項、学習プログラム内容、支援方法など）第二に、大学資源をどこまで活用することができるのか確認しながら進めた。（教職員の協力、教室等物理的条件など）第三に、持続的に取り組むことができる条件を確認しながら進めた。（関係者の負担、経費など）

【学習プログラム】

火曜日：一般学生と共に「社会教育課題研究（障害共生支援論）」を受講した。生涯学習の意義、その背景にある民主主義をテーマにして学び、最後にライフストーリーを語り合った。授業終了後に、KUPI学生がメンター学生の助けを借りながら、授業内容の理解を深めた。

水曜日：KUPI学生を対象としたオムニバス授業を行った。心理学、宇宙物理学、音楽学、音楽療法論、哲学、教育学を専門とする教員が、大学1年生の最初に教える内容を基本とし、それをかみ砕き、時間をかけて講義した。授業終了後に約1時間、KUPI学生がメンター学生の助けを借りながら、授業内容の理解を深める時間を設けた。

金曜日：神戸大学のサテライト施設「のびやかスペースあーち」を会場として、主にフィールドワークを行った。ボランティア活動の体験、商店街での聞き取り、話し合い学習など、コーディネイターやメンター学生の支援によって、自発性に基づいた学びを行った。

その他：課外活動として、ESDをテーマとする大学主催の2泊3日のワークキャンプ（邑久光明園）に2名のKUPI学生が参加した。

教職員の協力：職員は本事業に合わせて聴講生制度改正に尽力したり、雇用管理の便宜を積極的に図ってくれた。授業担当教員は「自らの刺激になる」と試行錯誤して取り組んでくれた。今後、さらに協力教員の輪を広げていきたい。

その他：教職員がそれほど無理をせず事業展開することができた。KUPI学生だけでなく、一般学生や教職員が、いかに楽しんで相互に学びあうことができるか、ということが本プログラムが持続する条件になることを確認した。また、今年度並みの経費によって展開できるプログラムの質と量を確認でき、モデルプログラムとしての知見となった。